京都大学	博士（文学）	氏名	横山剛
論文題目	中観派が説く諸法の体系 ―月称造『中観五蘊論』の研究―		

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、大乗仏教の一派である中観派が、いわゆる小乗仏教を代表する説一切有部の説く諸法の体系をどのように捉えていたかを明らかにすることである。そのために、チャンドラキールティ（Candrakīrti、月称、600-650年頃）作と伝わる『中観五蘊論』（Madhyamakapañcaskandhaka）の著者問題とチベット語訳テキストに関わる問題の解決に目処をつけた上で、『中観五蘊論』を取り上げている。これによってはじめて、諸法の体系に対する中観派の理解を正面から取り上げることが可能となったと言える。この点が本論文の最大の特色である。

第一章では、まず『中観五蘊論』に関する基本的な情報が整理される。その中で、特に、著者、書名、解説の性格が検討され、諸資料の伝える『中観五蘊論』の著者がチャンドラキールティで一致していること、『中観五蘊論』の本来の書名がPañcaskandhakaと考えられること、『中観五蘊論』が初学者の知を開くことを目的として著された綱要書であることが指摘されている。

第二章では、アバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta、11-12世紀）の『牟尼意趣荘厳』（Munimatālaṃkāra）と『中観五蘊論』の関係が論じられる。『牟尼意趣荘厳』のチベット語訳テキストの一部の版に挿入される割注が、一切法解説の典拠として『中観五蘊論』を挙げることも踏まえ、諸法の構成、解説の構成、解説の内容という三点から、実際に『牟尼意趣荘厳』と『中観五蘊論』を比較し、『牟尼意趣荘厳』の解説が『中観五蘊論』に基づいていることが示される。結果として、『牟尼意趣荘厳』のサンスクリット原典から、チベット語訳でしか現存しない『中観五蘊論』の原文の一部が回収可能であることも指摘されている。

第三章では、『中観五蘊論』の「慧」（prajñā）の解説に注目し、諸法の体系の学習が無我の理解に資すると考えられていることが示されている。また、同じ「慧」の解説に見られる諸法の自性を否定する議論について論じ、『中観五蘊論』では諸法の体系が説かれるけれども、その自性は注意深く斥けられていること、また、その中の相互依存関係を理由にした諸法の自性の否定が他の解説の中にも見られることが指摘されている。

第四章では、先行する諸論書との関係を考察しながら、『中観五蘊論』に説かれる諸法の体系の性格が描き出される。まず、先行研究にも指摘のある、ヴァスバンドゥ（Vasubandhu、世親、4–5世紀）の『五蘊論』（Pañcaskandhaka）、ならびに、塞建陀羅（*Skandhila，世親と同時代）の『入阿毘達磨論』（Abhidharmāvatāra）の二論書と

の関係が再考される。その際、先行研究によって指摘されてきた類似点ばかりでなく、相違点も含めて丁寧に検討され、その結果、『入阿毘達磨論』に見られる諸法の実在論証が『中観五蘊論』には現れないこと、カシミール有部の説を中心に据えた解説を行うことなどの特徴が明らかにされている。さらに、煩悩法の解説からナーガールジュナ（Nāgārjuna、龍樹、150-250年頃）の『宝行王正論』（Ratnāvalī）との関係が、また、十智の解説からヴァスミトラ（Vasumitra、世友、前1世紀頃か）の『品類足論』（Prakaraṇapāda）との関係が指摘されている。

第五章では、これまでの検討を踏まえて、著者問題が再検討される。先行研究では『中観五蘊論』の慧の解説のみをチャンドラキールティに帰するべきであると言われることがあるが、本論文では、先行研究が挙げる部分著作説の根拠の妥当性が逐一検討され、先行研究の挙げる根拠がチャンドラキールティの部分著作説を立証するには不十分であると判断されている。そして、先行研究が挙げる根拠の中には、むしろ、結偈に出る著者名等、チャンドラキールティの真作を裏付ける根拠となり得るものがあると考えられている。さらに、慧の解説の構成、経典引用、諸法の相互依存の解説という点から『中観五蘊論』に一貫した傾向が見出されるとし、慧とそれ以外の解説を別の著者に帰することに対し疑念が示されている。加えて、ツォンカパ（Tsoṅ kha pa, 1357-1419）が『善説金鬘』（Legs bśad gser phreṅ）の中で『中観五蘊論』をチャンドラキールティに帰すことを疑問視する点についても論じ、ツォンカパの主張もチャンドラキールティ真作説を斥けるための十分な根拠とは言えないとされる。

最後に、第六章では、『中観五蘊論』の説く法体系の中で「五蘊」が主要な位置を占めている点にあらためて注目し、有部が説く諸法の体系に遡って、五蘊の意義が論じられる。有部の初期から後期論書、さらに大乗論書へと至る諸法の体系の展開が概観され、『阿毘曇甘露味論』以降の有部論書には五蘊が中心に据えられ、それを十二処と十八界で補う体系が採用されていること、『倶舎論』の「界品」に説かれる諸法の体系においても、その解説の中心に五蘊があることが示されている。また、有漏無漏の分類と五蘊の関係、アビダルマと五蘊の関係、認識対象としての五取蘊という三つの点から、諸法の体系における五蘊の意義が考察され、五蘊が雑染と清浄の根拠であること、存在を分析する際の中心であること、誤った見解によって我や我所と把握されるものであることが、五蘊の基本的な特徴として示されている。

本論文では、『中観五蘊論』を用いて中観派が説く諸法の体系のひとつが示されたと言えるが、有部の諸法の体系は他の多数の中観論書に断片的に見られるため、それを丹念に回収し比較検討することが、今後の課題として残されている。特に、『中観五蘊論』以外のチャンドラキールティの著作の検討がまず必要になるであろう。

（論文審査の結果の要旨）

初期経典の中で整理されてきた仏教の基本的な教説は、経典とは別に「論」（アビダルマ）が著されるようになると、種々の教説が組み合わされ、体系化が図られることになった。この「論」を中心とする仏教がアビダルマ仏教と呼ばれるもので、それは、現象世界の背後に複数の存在（諸法）を想定し、その複数の存在から構成される現象世界を無常で非実在なものと説明した。中でも緻密な議論を展開し、精緻な「諸法の体系」を作り上げたのが、「五位七十五法」を説いたといわれる説一切有部である。説一切有部は、七十五の存在（法）を分割不可能で単一な実在として数えた。後に、ナーガールジュナ（龍樹、2〜3世紀）を祖とする大乗仏教の一派、中観派は、説一切有部に代表されるアビダルマ仏教を実在論と見なし、般若経の中で強調された空の思想を用いて、勝義の立場からは、徹底的に攻撃したが、一方で、世俗的な立場では、説一切有部が説くような世界も認めている。しかし、中観派が考える世俗の体系が一体どういうものか、また、それが中観派にとってどのような意味を持つのか。これらの点は、これまで充分具体的に解明されてきたとは言えない。その主な理由に、中観派があらゆる存在の否定を専らとするため、世俗の体系を説く中観論書がほとんどないこと、また、例外的に、チャンドラキールティ（月称、7世紀）作と伝わる『中観五蘊論』が残されているが、これも唯一残るチベット語訳には問題が多く、しかも著者性にも異論があったため、これまで充分に利用されてこなかったこと等が挙げられる。本論文は、多数の平行句を諸テキストより蒐集し、それを利用しつつ『中観五蘊論』のチベット語テキストを確立し、その著者を『中論』注釈者であるチャンドラキールティと確定した上で、『中観五蘊論』を通して、中観派の世俗の体系を扱おうとした意欲的な労作である。

論者は、第一章において『中観五蘊論』に関する諸情報を整理する中で、書名についての伝承を網羅的に検討し、『五蘊論』（Pañcaskandhaka）が本来の書名であったことを確認し、その上で、主にヴァスバンドゥ（世親、5世紀）の『五蘊論』と区別する目的で、チャンドラキールティ作として残る『五蘊論』に対し、後代に出る『中観五蘊論』という書名を使うことを提案している。続く第二章では、アバヤーカラグプタ（11〜12世紀）著『牟尼意趣荘厳』が『中観五蘊論』に基づいて解説している場合があることを、実例を挙げながら示し、近年サンスクリット原典の研究が進む『牟尼意趣荘厳』が、『中観五蘊論』研究にも有用であることを指摘する。第三章では、「慧」という心所法の解説の中に見られる法無我論証を取り上げ、そこに相互依存関係を根拠とした自性の非実在性論証が見られること、さらに、四大種や、識の解説でも同様の相互依存関係を根拠とする議論が見られることを指摘している。第四章では、『中観五蘊論』と先行する諸論書との関係を詳細に分析し、これまで既に指摘されていた『五蘊論』と『入阿毘達磨論』との関係に加え、『品類足論』やナーガール

ジュナ著『宝行王正論』との関係についても言及し、それらの諸論書との共通点と相違点を整理しながら『中観五蘊論』の性格を丁寧に描き出している。最後の二章のうち、第五章では、ここまでの議論をふまえ、『中観五蘊論』の著者問題を再検討し、先行研究にあった部分著作説を斥け、第六章では、先行する説一切有部に見られる五蘊理解に基づいて「五蘊論」を説くことの意義を論じている。

本論文の特筆すべき点は三つある。第一に、問題の多い『中観五蘊論』のチベット語テキストに対して、『牟尼意趣荘厳』を中心とするサンスクリットの平行句を存分に利用して、信頼しうる校訂テキストを作成し、『中観五蘊論』研究の基盤を確立したことである。

第二に、先行研究に見られた『中観五蘊論』がチャンドラキールティの真作であることを疑う議論を逐一斥け、改めてチャンドラキールティの真作である可能性が極めて高いことを示したことである。これによって、『中観五蘊論』を用いて中観派の世俗説を論じる前提を整えたことになる。

第三に、『中観五蘊論』に影響を与えた論書を検討することを通じて、中観派の世俗説の全体像のひとつを具体的に示したことである。サンスクリット回収に利用した『牟尼意趣荘厳』からも『中観五蘊論』が後代に与えた影響は明らかであるが、その全体がどのような性格を持つかを明確にした意義は大きく、今後の中観派思想の研究に新たな視点を提供しうる成果と言える。

しかし、本論文にも問題がないわけではない。本論文は、チャンドラキールティが『中観五蘊論』を著した可能性が極めて高いことを示したものの、なぜこのような五蘊を解説する論書を、他の中観論師ではなくチャンドラキールティが書く必要があったのかが論じられていない。そのため、著者問題に関する議論が完全に説得力があるものになっていないのは惜しまれる。また、チャンドラキールティの他の著作の扱いが不充分であることも、本論文の弱点に数えられる。『中観五蘊論』に説かれる議論がチャンドラキールティの他の論書でどのように扱われるかまで取り上げることができれば、チャンドラキールティの世俗説に関する議論も、著者問題もより深めることができたのではないかと思われる。しかしながら、これらの点は論者も自覚しており、今後の研究の中で取り組むべき問題であると考えられ、本論文の価値を著しく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。２０１７年２月１４日、調査委員４名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。